

学び続ける生徒を 育てるために 英語教育に求められること

グローバル化への対応や日本の学生の内向き志向などが課題として指摘される中、高校の英語教育に対する期待はこれまでになく高まっている。新学習指導要領において、英語による授業の実践が求められたのはその象徴といえる。今後、日本の英語教育には何が求められており、教師にはどのような心構えが必要となるのか。

グローバル時代に 求められる力とは

——まず、これからの社会でどんな力が必要になると思われますか。

岡本 グローバル時代に必要な力という点、まず語学に堪能であることを思い浮かべる人が多いと思いますが、私は新しい環境に溶け込み、ゼロから人間関係を構築して、目標に対して成果を出せる力だと考えます。もちろん英語力も大切ですが、それ以前に多様な価値観を受け入れる柔軟性、仲間と共に前に進む協調性、課題を発見し解決する計画性や問題解決能力といった力が重要だと思っています。**亀谷** 私は2つあると考えています。1つはコミュニケーション能力です。自分の考えを相手に伝えるとき同時に、相手が伝えたいことを柔軟かつ適切に受信する力です。もう1つは問題解決能力です。うまくいかないことに対して原因を探して解決したり、現状に満足することなく、より良い自分や集団を求めて日々前進したりする姿勢が大切であり、この2つの

力が今後、世界の舞台でも必要になると思います。

太田 変化の激しい社会では、身に付けた知識はすぐに古びてしまいます。そういう社会で自分の人生を豊かなものにし、持ち味を生かして社会貢献をしていくためには、「生涯にわたり学び続ける人」を育てることが大切だと考えています。学校教育法第30条第2項は、そのために必要な要素を3つ挙げています。第一に、基礎的な知識・技能の習得。第二に、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力など。第三は、主体的に学習に取り組む態度です。社会で役立つ学びの多くは、実際に社会に出てから始めなければなりません。学校教育にはその基盤づくりが求められているのです。テストや宿題があるから勉強するのではなく、自ら進んで学ぶ生徒を育てることが何よりも重要なのです。

人間関係を育みやすいのが 英語の授業のメリット

——コミュニケーション能力の育

成が課題に挙げられましたが、学校という限られた人間関係の中で育むことは出来るのでしょうか。

岡本 本校では部活動や学校行事、SSHでの活動発表などを生徒のコミュニケーション能力育成の機会としても位置付けています。先輩や後輩との縦のつながり、グループワークで友だちと協力して作り上げる経験などを通して、他者とのかわり方を学べるはずですよ。

亀谷 英語という教科は授業の中でインタラクシオンの機会を設けることが出来るので、教科学習の中で人間関係を育むことが可能な教科であると考えます。多岐にわたるテーマの文章を読み、それに基づいてさまざまな場面を設定し、ペアワークやグループワークを行うことで、情報や考えの受信力や発信力が身に付くと思います。クラスの中にはコミュニケーションが得意な生徒とそうでない生徒がいます。しかし、クラスの中で彼らが一緒に活動することで、コミュニケーションが得意な生徒が苦手な生徒に配慮するよう

になったり、おとなしい生徒が自分から話せるようになったりするなど、授業を通して生徒が人間関係を構築し、成長していく姿を何度も見てきました。

太田 現行の学習指導要領も、新学習指導要領でも、外国語科の目標は、コミュニケーション能力の育成です。その実現のためには、親和関係の構築と「Mutual Trust and Respect（相互信頼と敬意）」の大切さに気付かせることが重要であり、そうした姿勢は人との言葉を紹介した触れ合いでしか身に付きません。人間関係の構築とコミュニケーション能力の向上のためにも、授業内で意図的にインタ



文部科学省初等中等教育局視学官
太田光春 おおた・みつはる

愛知県総合教育センター研究部教科研究室研究指導
主事、文部科学省教科調査官などを経て、現職。

ラクシオンの機会を設けることが大切です。

高校現場に求められる パラダイムシフト

——コミュニケーション能力や学び続ける力が重要とのことですが、それらの力を生徒に付けさせるために、学校にはどのような意識改革が求められるのでしょうか。

太田 入試に合格するための学力だけで子どもを評価する姿勢からの脱却が、学校に求められていると思います。

社会はオーケストラのようなものです。美しい演奏を奏するためには、全ての楽器の演奏者が周り



東京都立戸山高校
岡本眞一郎 おかもと・しんいちろう

教職歴30年。同校に赴任して2年目。進路部主任。英語科。東京都立青山高校などの勤務を経て、現職。

の音をじっくり聴きながら、一番に応じて自分の能力や特色を100%発揮することが求められます。「他人の立場で考えられる」「いつも笑顔で周囲を和ませる」

というように、社会では筆記試験だけでは測れない資質や能力も重要な役割を果たしています。だからこそ、学校が本気になり、多様な価値観を尊重する姿勢を示す必要があると思います。高等学校の真価は、18歳の時点での進学・進路実績ではなく、卒業してからも学び続ける人を育成できたかどうかで問われているのです。

岡本 これまで、日本の英語教育は正確さを追求しすぎていたので



岐阜県立東濃実業高校
亀谷みゆき かめがい・みゆき

教職歴24年。岐阜県立可児高校などを経て同校3年目。英語科。「高等学校学習指導要領解説」作成協力者。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

はないかと思えます。必要な場合には正確さを求めつつ、本来の狙いは、コミュニケーション能力の育成であるという前提を見つめ直し、曖昧さも認めてコミュニケーションの活性化を促す雰囲気を作

業につくることも重要ではないでしょうか。受験勉強の影響か、正確な答えを求める傾向は生徒の方向に強いと感じることもあります。曖昧なものも受け入れるような体験を生徒にさせ、意識を変え、これも、生涯学び続ける力の育成には必要になるかもしれません。

太田 岡本先生が指摘された通り、生徒が「間違っているかもしれないけれど使ってみよう」と思えるような雰囲気づくりをするのが大切です。学習した表現を使って自分の考えや気持ちを伝えようとし、それが伝わったという実感が得られると、生徒はもっと勉強したいと思うようになりま

す。授業で大切なのは、教師自らリスク・テーキングをすることです。外国の言葉ですから、教師であっても間違えることはあります。生

徒の前で立ち往生したらどうしよう、間違えたらどうしようなどと考えるよりも、まずは英語で伝えようと努力する姿勢を見せることが必要ではないでしょうか。

活動重視の授業で 大学入試に対応できる

——大学入試が変わらなければ、先生方や生徒の意識も変わりづらいという意見もあります。

亀谷 ここ数年で、入試問題も変わってきていると思いますし、活動中心の授業で入試に対応できる力は身に付けられるのではないかと思います。3年間の授業の中で、英語を英語のまま読んで理解し、聞いたり読んだりした内容について、相手に伝わるように英語で自分の考えを書いたり、相手と意見交換をしたりするような活動をしてきた生徒であれば、むしろ自信を持って解答できる問題も多いのではないかと思います。

太田 コミュニケーション重視の授業を実践している高校の多くは、結果として大学入試の実績を伸ばしているようです。英語を学

ぶことは楽しい、将来役に立つ、ということが分かれば、生徒は自ら学習するようになります。コミュニケーション能力の育成を中心とした授業は、センター試験にも有効だと考えます。センター試験は約3000〜4000語の英語を80分で処理することを求めています。短時間に高速の言語処理をするためには、英語を英語のまま理解する経験を積みなければなりません。ですから、入試にも有効なのです。

使う必然性があるからこそ 授業は英語で行うことを 基本とする

——英語を学び続ける態度を身に付けるには、どのような指導がポイントとなるのでしょうか。

岡本 私は、英語を学ぶのは楽しいということを折に触れて伝えるようにしています。教科書の題材だけではなく、新聞や雑誌からテーマを取り上げて授業で紹介すると、自分でインターネットを使って英語の記事を調べる生徒もいます。学ぶ楽しさや英語を使う

楽しさが、学び続ける原動力になると思えます。もう1つは、たとえ教師が言ったことでも、うのみにするだけはいけないうことを強調しています。生徒は自分で調べたり考えたりすることをあまりせずに、正確な答えを求める傾向があります。当たり前と思っていることに対しても批評する態度を養うことで、新しい課題や疑問を発見してほしいと思っています。

亀谷 私が授業で大切にしているのは、生徒が英語を学び続けるきっかけをつくることです。そのため1つの方策として、授業の中で生徒が「英語が聞けた」「通じた」という成功体験をし、達成感を味わえる場面を意図的に組み込むことを重視しています。それには、生徒が出来たことを褒める機会を逃さないことが大切です。授業計画を立てる時には、どのような言語材料を使うのかということと共に、それをいかに成功体験の中で身に付けることが出来るかというところまで考えています。

太田 両先生がおっしゃる通り、英語を学ぶ楽しさを教えたり、成



功体験を積み重ねることが英語学習への意欲を高めると、私も思います。その前提として、生徒も教師も授業で英語を使うことが必要です。日本は言語環境的にはEFL(English as a Foreign Language)です。ですから、教室から一歩外に出たら、英語を使う必要はあり

ません。自分で求めなければ、生徒には英語を使う機会がないのです。学校の授業は唯一の機会です。泳げない人がプールに入らないと泳げるようにならないのと同じように、英語も使わなければ絶対に身に付きません。そういった意味で、授業の果たすべき役割は非常に大きいのです。

「日本人の教師」こそが 生徒のロールモデルとなる

亀谷 教師が生徒の前で英語を使うこと自体も、生徒が学ぶきっかけにつながると思います。教師がロールモデルになることで、「日本でも6年間英語を勉強すれば話せるようになる。自分も先生のようになりたい」と生徒も希望を持つて前向きに学習に取り組めるようになると思います。

太田 ネーティブスピーカーは音声モデルは提供できませんが、生徒のロールモデルにはなれません。「母国語だから話せて当然」と生徒は思うだけです。しかし、日本人の教師が英語を使えば「自分もいつかこんなふうに英語が使える

ようになるかもしれない」と、目標や期待感を持たせることが出来ます。教育の使命の1つは、生徒に可能性を信じて目標に向かって学ぶ意欲を与えることです。教師が率先して英語を使うことで、生徒はこれらを手にすることが出来るのではないのでしょうか。

同じスタートラインに立つ今が 学び合うチャンス

岡本 現場では英語で授業をすることに對して依然として抵抗感を持つている先生も多くいると感じます。恐らく、教師自身が読式式の授業しか受けてこなかったことが大きな原因だと思えます。コミュニケーションを中心とした授業を行う、教師のためのロールモデルがないのです。また、大学入試も徐々に変わりつつありますが、一部には解答に厳密な正確さを求める大学もあります。入試に對應できる力を付けさせたいと教師が思うあまり、生徒に正確さを要求してしまう傾向もあると思います。本校では、授業の公開を義務付けたり、他校からの授業見学

を受け入れたりして、教師自身がリスク・テイクングを恐れない環境を整えつつあります。教師が学び合い高め合っていく環境づくりが、今後ますます必要になると思います。

亀谷 私は県内の英語科教師に呼び掛けて勉強会を開いています。先生方と接していると、「変えたけれど変えることが出来ない」と思っている先生が多いと感じます。そのため、互いに授業を見学し、改善すべきところを話し合い、より良い授業を目指しています。今は英語教育の大きな転換期であり、先生方が同じスタートラインに立っている今こそ、学び合い、支え合いながら、指導力を高めていくチャンスではないでしょうか。私たちが目指すべき目標は、生徒に未来の社会で生きていくことが出来る力を付けさせることです。今こそ生徒のために我々英語教師が手と手をつなぎ、教育委員会や学校、校内の英語科や学年がチームになって意思統一を図り、授業改善を重ねていくことが大切だと思います。